
今宵の月は綺麗だ

草民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今宵の月は綺麗だ

【Zマーク】

Z9781Y

【作者名】

草民

【あらすじ】

鳥哭(ニ歳)に、玄奘(ニ歳)と孫悟空みたいな関係の子が居たとしたら。そんな妄想。

(前書き)

鳴哭の章

ダツチな妻のカナちゃんを片手に屋上に登る。

白衣に身を包んだ、少女のような容姿の少年。

そんな凡愚には理解できない行動を取る男の娘が、この物語の主人公である。

「カナちゃん片手に、この世等はと憂いちゃう俺マジクール」

そして何やら不器用な、普段笑う事を忘れているような。

そんな笑顔を浮かべながら、うさ耳の少女のような人形?と屋上で踊りだす少年。

だがしかし、無駄に洗練されているその動きは、才能の無駄遣いとしか言いようが無い。

相手が人間ならばさぞ驚くだろう。何故このような奇行じみた事をしているのか。

普段笑わない彼が、笑顔を浮かべている。彼を知っている人物であれば尚のこと。

「人間なんて所詮分かり合えないものさー。つまんないよねー カナちゃん?」

「…」

「そつかそつか!流石カナちゃん!俺と長年トーキギャザーしてただけの事はある!」

「…」

「あの腐れ爺どもは、なんで俺の崇高な考えが理解できないのか。何故俺が準教授のままなのか……恐らく俺の溢れる才能と若さにSHTしてゐるからに違いない…！」

「…」

人形に話しかけながら笑う少年は、本当に楽しそうに踊る。少年が踊るこの屋上は、とある大学の研究塔の上である。

しかし立ち入りは禁止されていて、危ない場所だつたりする。空の月は雲に覆われて、少年の心の雨が降り止まない。

「もう果たす事ができない約束か……いかんね、昔を思い出しちゃうよ……こつこの雨は上がるんだろうな？ずっと降りっぱなしだぜ」

「…」

そう言いながら、屋上の手すりに手をかける少年。

「死人には勝てねえや……同じ土俵に上がれば勝てるかなあ」

「…」

少年は雨が降つてゐると認識しているが、”雨？なぞ降つていない。そもそも少女のように見える人形も、彼がそう見えてゐると思い込んでいるだけで。

本当はただのウサギのぬいぐるみだ。
だが、彼の中ではそれが真実だったのだ。

「失って氣づくなんてなー…天才が呆れけやつよなほんとー…
うん。決めた。カナちゃんとはここでお別れだ。今までありがとう。
お前は元気に暮らせよ?」

「……！」

そう言い、少年は抱きしめていたぬいぐるみを地面上に座らせる、空へ
駆ける。

もちろん少年は空を飛ぶ力等持ち合わせてはいない。そのまま落下
していくだけだ。

「今宵の月は綺麗なんだろうな……」

見え隠れする月を見ながら彼は独りごちる。

落下していく中で少年は、置いていったぬいぐるみの日から、涙が
流れているような幻想を見た。

お空からアイキヤンフライしたら、変なところに一つの間にか居た。何を言つて居るのかわからないと思うが。俺にも理解できない。

池があるのでどうあえず、ふつくしご自分でも堪能しようと思つた。いつも通りのだぼだぼの白衣に、灰色っぽい髪……あれ？純白になつてない？

とうとう俺は天使化してしまつたのか。その内ナリスなカーラーンからお迎えが来そうだ。

そんな風に考え込んでいると、変なおっちゃんに絡まれたのさ。爪長いし、歯もなんか犬歯？だけ長い。何者なのかと聞けば妖怪だとたまうのや。

俺はとうとう妖怪のおっさんが跋扈する、幻想に迷い込んでしまつたのかとげんによりした気分になる。天国に行くと思ったら、マヨヒガは良いことに。一度はおこでおいでな展開になつていた。

いかんせん戦闘技術なんて持ち合わせていなかつたので、か弱い俺は逃げ惑うしかなかつたのや。

まあ昔から逃げる事に関しては天才的だつたので、そそくさと逃げおおせたんだが。

だがいかんせん、研究尽くしの日々だったので身体が鈍つっていたのだろうか？俺はすぐへたつてしまつ。このままだと、追いつかれてしまうかもしねない。

どつか隠れられるところ。誰か人が居るところ。誰か盾にしてやるよーー！

そんな感じで走っていた俺は、建物を発見する。あそこにするか。

そんな風に逃げ込んだんだよ。だがその逃げた先がいかんかった。寺か神社か知らんが。よくわからんところに逃げ込んでたんだ。

すると、なんか頭頂部だけ光ってるあや いおっさんがあの前に居た。

「！」も妖怪のすべつかよーー」と俺は思わず叫んでしまった。

だがこのおっさんは少し優しげな表情で、「もう安心していいぞ小娘」なんてのたまないながら俺に微笑みかけるのを。

そして俺を追っかけていた妖怪のおっさんどこの対面！

とうとう俺は一人に食われてしまうのかと思つたが、そんな展開は無かつた。

何かすげえ轟音が鳴つたかと思つたら、俺を追いかけてきた妖怪が粉々に吹き飛んだ。

ぐろいです。

次は俺の番か……襲われるのは嫌なので、俺はちやんと男だと説明したら触つてきやがつた。

ナニに？知らん、忘れた。「変態死ねーー」と殴つたら笑つてやがつた。

そりゃ、これが剛内三蔵との出会いだった。

それから、俺は何故か剛内に引き連れて寺で住む事になってしまったのである。

俺が幼女に見えるからと詫びてしまわかにつけ……と思つたが。そういうのは無かつた。

そうか俺は寺でニーーーーになれるのか、と思つたが。そりゃイカンザギイ！

何故かスキンヘッドのガキどもに混ざつて経典読んだり、境内お掃除したり、組み手？なんかをする羽田になる。

剛内三蔵がたまに俺にだけ個別授業だとでも言わんばかりに、俺をじじくのは酷いいじめだった。

そして二つの間にやら俺主席になつていて、次の日また人を倒す羽田になる。

大半の寺のガキどもは、何か不真面目なのに何でこいつがどいつのいうのなんて、そんな感じだ。

中には俺の姿が気に入ったのかハアハア言いながらみつちゃん萌えーとか毒されている奴も居るが。

そうか、自己紹介をするときのみつちゃんなのですー…よろしくー腐れ野郎どもと言つたのが駄目だったのかな。

特に理由は無い。苗字まで言わんで良いだろつと思つたし、適当で

いいだろ？と思つたからだ。

主席だから田立つかなと思い、そつ思つた田から手を抜き始める。

剛内三蔵にも、もう遅れを取る事は無くなつたし、覚えるモノはすべて覚えたと思つ。

最初は楽しかつたが、慣れといつものは怖いもので。

俺は映るもの全てがまた、つまらないモノに成り下がつてしまつた。だが、別にしたい事があるわけでもない。

このよくわからない世界でも生きていけるだろ？と思つ知識も力も手に入れた。

後はだらだらニートちやんをするしかないね。そんな感じで月日が流れていつたのである。

剛内三蔵は、何か思つていた人間とは違うとでも言わんばかりに落胆してた気がする。

勝手に人に期待して、勝手に落胆する。

この世界が自分の居た世界と同じなのか違うのかわからないが、人間はどこでもやはり同じなのだと、俺は思つた。

そんな怠惰な日常を過いし始め、数年経つたある日、俺は運命に出会つ。

ナーヤーヤーヤーヤーラケてる奴。それが第一印象だった。名を健四といつ。何やら影がある奴だったが、寺のアホどもは気づかない。

座学、組み手もトップクラス、奴はたちまち主席に登つた。

人当たりも良く、たちまちあいつは寺の中心的存在になる。

俺にキヤーキヤー言つていたアホどもも、あいつに懐く。

まあ別に面白くもなんとも無い奴等だったのでも良こと感じた。

この寺に来た頃の俺みたいな奴だなあとそう思つた。

だが日々を過ごしていく内に、コイツはただの天才ちゃんではなかつたと知る。

「あんたも飽いてるんだろう？」そつある口、一人でぼーっとしていつ俺に奴が話しかける。

すごく、似ている。俺に、まるで合わせ鏡のように。そう奴はのたまつ。

俺も口を見ればわかつた。こいつは現状に満足していない。今が楽しくない、面白くない。不満だけが募るだけ。そして自らを偽る。何かを楽しむために。

そんな日々を過ごしていると、口が語りかける。

まあ俺とはまた違つタイプだけどな。そつ感じながら、一度じつくり話してみるかと話し合つ。

その口、色々語り合つ。意氣投合し、俺はけんゆー。後のけんゆーんと無一の同胞となる。

アレから一緒になつて、H口いお経を創作したり。

一緒に寺の壁にえつちでむふふな絵を描いたり馬鹿な事ばかりしていた。

ある日、けんゆーが、俺がいつも持ち歩いているつわせんを欲しがる
よつな日で見ているのに気がつく。

俺は趣味で作つてゐる、ウサギのぬいぐるみを一つ分けてやつたら
「みつちやんありがとうー」とすくへ喜んだ。
何だ、お前もみつちやん好きなのか。中々わかる奴じやないかと再認
識。

そして、こうした馬鹿な日々が続いていき、主席はけんゆー。次席
が手を抜いている俺。

この寺はアホしかいないのか。仕方ないからもつと楽しい寺にして
やろつか?

しかし、やるせない気分にしかならないので、再びぬいぐるみを作
る俺がジャステイス。

そんな感じで日々が過ぎてこつたある日の事である。

寺に光明三藏がやって来た。

こいつを見た瞬間俺は、こいがどうこう世界なのかを理解し、こい

に来る前の記憶を思い出す。

ああ、なんだ。一次元に俺は来たのかと。
おっさんだらけの幻想 じゃねえ！！イケメンだらけの桃源郷だつ
た！！

なんだ、昔見たことあるような気がしていたが、知ってる事だつた
のか。

俺の退屈でつまらないという感情が加速する。

まるでアイドルにキャーキャー言ひハーハーな女どものよつて。
浮ついている寺の腐れ野郎どもに呆れる俺とけんゆー。

「 ぐだらないね 」（なア）

二人顔を見合させて、はあ……とため息をついてしまったのは仕方
の無い事だと思ひ。

そして次の日。

俺はじょんけんで勝つたので、掃除せずに寝つ転がつて生足ぶーら
ぶーら。

けんゆーは仕方ないねって感じで境内をお掃除しています。

そんな俺たちの所に例のアイドル。光明三藏法師がやつてきた。
俺はめんどくさいのが嫌いなので、つたさんを抱きしめて寝たふりをする。

みつちやんも口の相手しりよ。やつ言わんばかりの視線をけんゆーは俺に送るが知らん顔。

仕方なく光明三藏の相手をじだすけんゆーちゃんマジ天使。

「なんでしょうーかね？」

「ああ、いえね。ウチの江流も大きくなつたらこんなカンジかなつて」

「…」

「私の息子みたいなものです。4・5年経てばそこで寝たふりをしている、可愛い子くらいになるんじやないでしょうか。後、ちょっと貴方に似てるトコありますね」

「俺に？顔がですか？」

「いえ、顔は全然」

俺がうさん抱きしめて、狸寝入りしていたのはばれていたようだ。流石三藏を名乗るだけあって、大した奴だ！！

助けてくれ！みたいな視線を俺によこすけんゆー。
まあどうでもいいからけんゆーに任せとひづ。けんゆーは犠牲になつたのだ…

「……へえ。今いくつですか

「今三十九ですが」

「いやアンタじゃなくて」

「ああ江流ですか。今年で四歳です」

「あ、そーつスカ」

「これがまた可愛いんですよとか、夜寝る時は私が一緒じゃないと寝られないとか、まだおねしょするんですよ? 可愛いでしょう? とか親バカの子供自慢がはじまりました。これにはけんゆーも苦笑い。

「 といひで健邑君。貴方は何故この修行寺に入ったのですか」

「ああ、そういうば何でここに来たんだろうねけんゆー。いつもアホな話しかしないから、そんな話した事なかつたわ。俺は耳をすませて、一人の会話を聞き続ける。

「……何で?」

「イメージに合わないなあと思つて。貴方達、J-1Y-1体育会系は苦手なタイプじゅありません?」

「『三蔵法師』になるためですよ。 それが、一番難しい事だつ

て聞いたから」

「ほお……」

「あーあーあこねー……」

俺は寝てこるんだ。寝ている事にしろ。話をふるんじやない。

「……大概の事は手をだしてみましたけど。実際どれも簡単で、つまらない事ばっかりだつたから。退屈しなこものが欲しかったんですね。……そこで寝たふりをする”馬鹿?”と一緒にす

俺の事をさりげなく馬鹿にしやがつたので、小さい小型の「ひをせん」を投げつけてやつた。

これにはけんゆーも大喜び。だと想ひ。まあなんだ、めんどくさこのを押し付けて、ちよつとは悪こと思つてゐる。

「……はあ成る程。何をやつてもつまらないとなると、貴方達はよっぽどつまらない人間なんですねえ」

この言葉に俺たちは敏感に反応してしまつ。

びくつとする俺と、目を細めて光明を睨むけんゆー。

落ち着け馬鹿。相手のペースに乗せられるんじやない。

「……わ、おおさんでも、貰つてしまふつかね」

「……は？」

「は？ つてこんなに枯葉を集めたら、お芋焼かないで一体何を焼くんです？」

「……これから毎日寺を焼こうぜ？」

「みつちゃんそれ違う。乗せられんなよ」

これが三人の知り合った瞬間であった。

それから数日経つたある日の出来事である。
剛内三蔵が吐血して倒れたのである。

ああ、おっさんどうぞお迎えが来ちゃったんだね。
世話にはなったけど情なんて芽生えなかつた。
まあ俺は俺が作ったうさんにしか情なんて芽生えない。仕方ない
ね。

そしてその夜、剛内の内弟子？ 60だか70だか居る奴等が本堂に
集められる。

けんゆーと行く道中、うわわわわわをしながら追いかけっこをしてたら剛内に怒られた。

どうやら無天経文の後継者を決めたいらしい。
けんゆーがそわそわしてた。まったくわかりやすいやつだねえ。

俺はすぐ興味が無かつたです。昔ソリ全部暗記したし。
あんな古臭い書物に用はない。

そして継承者？を決める選抜者の名前が呼び上げられる。
そこに俺とけんゆーの名前が出る事は無かつた。

けんゆーは「うだいに食つて掛かる。

どのような人選で、如何な条件によるものなのかと。
ごうだいは、聞く耳もちませーんみたいなカンジで、それがわから
ない以上、お前が選ばれる事は無いとか言つてた。

これに怒っちゃつたのか、けんゆーと「うだいの喧嘩が勃発。
けんゆーは華麗な身体捌きですぐ、「うだいを組み伏せる。
流石けんゆーだと褒めてやりたいところだ！

俺は「ええぞ！ええぞ！」つて感じで見守るだけだったけど。
光明は「楽しいですか？それ」みたいな感じでけんゆーの手握つて
止めた。

折角面白い事が起きそうだったのに。もう、焦らすのが好きなんだ
から光明は。

そして、そんなこんなで懲罰牢に入れられちゃつた、けんゆーに差
し入れを持つていく最中だつたりする。

「よつ！残念だつたな途中で止められて」

「……みつちやんか、あいつ滅茶苦茶強いよ。手にまだ握られた跡
が残つてゐる」

「まじかよ。あんな人畜無害みたいな顔してそつとつのやり手だつ
たとは……ケツ狙われてるかもよけんゆー」

「やめてくれよ。縁起でもない
「違いない」

ちょいと落ち込んでるかなって思って、俺はちょいとした和むトークをする。

まあそこまで深刻に落ち込んでるって訳でもなかつたね。良かったね。

「なあ……あいつなら俺たちの”渴き”を潤してくれるんじやないか？」

「……はあ？ 何々？ おまえまだ人間に”期待”なんてしてたの？ おつどりいたア！ 若いっていいねえ！ 俺にはそんな発想に至る事すら無かつた。新しい発見だよコレはーー！」

「……」

何なの？ 何感化されはじめてるのけんゆー？

お前は俺と同じような奴なんだろ。感化されてんなんや。

俺がフヒヒ笑うと、けんゆーは黙つちやつた。

まあ落ち込んで無かつたし、別に長屈する必要性は無いなと思つて。差し入れのうわせたんタイプのヤツハーシ（みつけやん作）を渡し、俺はその場を後にする。

部屋に帰る途中で光明に会つたが、「仲がよのじこんですね」なんてほざきやがつた。

俺とあこつはそんな仲良じよじの関係じゃねーよ。

気が合ひ、波長が合ひ。話が合ひ、一緒に居て楽しい。だから居るだけ。利害が一致してるから、だから一緒にただ居るだけだ。

「……そりですか」なんて妙ににやにやした表情で行つた光明に、今度うわざと爆弾でも投げてやろうと思いました。

そして後継者選定の戦いがはじまる。

俺がふらふらと生足をバタつかせて、うわざんと戯れないと。光明が一緒に見に行きませんか？なんてほざくんですよ。

まあ暇だつたし？面白い奴だつたから、俺はついていくことにした。

そして戦いもそろそろ最終決定戦！みたいな感じ。

相手は剛内三蔵。寺の腐れ野郎どもはとまどつてる。馬鹿じやねえの？さつさとやれよ。戦いなんだろ？油断したら死ぬぜ？

そして、いつのまにか現れていたけんゆーにぱつぱつと されていく腐れ野郎ども。ほらね？言わんこつちやない。

真打ち登場みたいな感じで、けんゆー大暴れな快進撃。イカすじやない。

一緒に妄想するだけで、マントラ無しで術を行使できぬよ」にした特訓が役に立つたな。

俺も一緒に慣れようかなって思つたんだけど、光明に止められました。

「こいつマジどんな握力してやがんだよ。
いとえワロタ。

「やはつこひはなるか……」

そう、剛内が呟いたのが合図とでもいつよつこ一人は動き出す。
そして熱いバトルになるかなって思つたんだけど。

剛内すぐ倒されちゃつたね。よえー。

まあ本気の俺より弱かつたし、仕方ないね。

そして一羽の鶴が啼いたような気がした。

返り血で真っ赤なような、真っ黒なようなけんゆー。

そんなけんゆーに光明は話しかける。

「……また、逝き損ないましたか?」

まあ、剛内も病氣で死ぬ前に決着付けたかったんだろうな。
ごつだいもう動けん。これでいいんじやねえの、うん。
けんゆーは黙つたまま、やるせない表情で俺たちを見るだけだった。

その後、光明が”鳥哭チヤクラ？”と名付けた最年少の三藏法師の額には、選ばれしモノの証印が現れる事は終ぞ無かつた。

「……月が隠れたと思つたら貴方達のせいでしたか」

「会つて第一声が酷い言いがかりの若作りに、俺は悲しみが鬼になつた。なぐさめて！けんちゃん！」

「酷い言いがかりだよなア？みつちやん」

俺が苗を懷古しながら、若作り野郎に折角会いに来てやつたといつのにね。

「いっは、俺たちのせいで月が隠れたといつ。 酷いよね！ けんちゃんに頭をなでなでされる俺がジャステイクなのわ。

「貴方も若作りじゃありませんか……ホラ、鈴虫すら鳴き止んじゃいましたよ」

「あ ハイハイ。 そりやすみませんでしたね」

「貴方達は相変わらず、仲がよろしい事で」

「ねね、せつしきのが蹲の空から降つてきて、桃を割ると出できた太郎？」

「いやいやみつちゃん、クマに斧をブンブン振り回してた所を、光明が止めて連れてきた。筋太郎じゃなかつたつけ？」

「どれも合つてません。江流です。もつじき七歳になります。可愛いんですよコレがまた。しかし、いまだに貴方達の思考回路が理解できませんよほんと」

折角殺伐とした雰囲気（ふいんき）で何故か変換できた）を変えてやろづと俺たちがボケてやつたのに。

光明は普通に返すという愚行を俺たちに喰らわせた。なんて奴だ……

俺はやるせなくなつてタバコを飲み始める。

拗ねないでくださいよと光明は言つたが、俺は拗ねてなんて無いもん。

「生意氣そудいいよね」

「もハ本当に、数年前の誰かさん達を見て、このよハアホアホ」

「へー。誰の事だろーね（な）」

「やれやれ」

子供扱いしやがる光明に俺たちはすかさず知らんぷりする。
鈴虫君達も「この若作りは妄想狂でいかん」とでも言つて再び
鳴き始める。

柿ピーないの？ベースタービー？と俺たちが言つと。

高いですよと光明は言つ。

金取るのかよ！SHUTE!!

「ああ そりいえばアレですね。お久しぶりですお一人とも」

えつ、今更？今更なの？俺とけんちゃんは呆然としてしまった。
さつさつ俺たちの事を訳がわからなって感じで光明は言つていたが。

お前のほつが訳がわからなくて面白こよ本当に。

俺たちは思わず苦笑い。

「ククク…アンタ本つ当に変わんないなア光明」

「フヒヒ…俺もあんたみたいになりたいもんだよ光明」

「……それって。一応褒められてるんでしょつかね？」

「「「フーン。内緒」」

相変わらず二人集えばなんとやう。

でも楽しい、多分ふたりもやう思つていなはず。

見上げてみると、さつきまで隠れていた月が出ていた。
心の兩は相変わらず降つたままだ。今も昔も変わらない。
けど、ここつらと語ると少しほ、ましん気分になる。

今宵の月は綺麗だなア

「 まだ降りてないよね、ボクタチもアンタも」

だつてホラ 貴方は 今もまだ、そこに晒るから。

全ては月とウサギだけが見ていた物語

補足説明的な何か

冒頭のぬいぐるみ 死んだ恋人からの贈り物 みつちゃんの宝物だ
つた

みつちゃん キてる男の娘 趣味はぬいぐるみ作り

けんちゃん 原作より明るい鳥哭な三蔵 みつちゃんが作ったつさ
さんがあ氣に入り

光明 若作りの実は三蔵な奴

あとがき

虚構の歪な合わせ鏡。二人の嘘吐きが交差する時、物語は k s k :
: しない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9781y/>

今宵の月は綺麗だ

2011年11月29日19時51分発行